

ポスト・シカゴ学派時代の入門教科書！

——『プラクティカル産業組織論』を刊行して

泉田 成美

はじめに

…認識パターンを変えることの難しさ

もう数年前のことになるが、たまたま精神科のお医者さんと飲みながら話をしていたら、「あのね、泉田さん。人間というのはそれぞれ物事を認識するパターンというのを持っていてね、一度そのパターンが確立してしまつと、あとからそれを修正するのはすごく難しいんですよ」と言われた。「がんで私のアドバイスをちっとも聞こうとしない学生がいて困っているんで

すよ」という私の愚痴に対してのアドバイスである。その日そのあとで何の話をしたのか全く覚えていないが、不思議なことにその言葉だけは鮮明に覚えていて。それは、その言葉の持っている意味合いが私と産業組織論との関わり方に重なるところが多かったからなのだろう。

産業組織論の劇的な変化

…ハーバード学派からポスト・シカゴ学派へ

産業組織論は企業行動や産業組織を研究対象とする経済学の一分野である

ド・シカゴ論争と呼ばれる大論争に発展していった。この論争の結果、シカゴ学派の主張が受け入れられるようになり、一九八〇年代になるとシカゴ学派の競争政策が採用されて大規模な規制緩和が実現された。

しかしながらその一方で、一九八〇年代にはゲーム理論や情報の経済学が本格的に導入され、寡占市場の理論的な分析が急速に発展した結果、新産業組織論(NIO)が誕生することになった。また、コンピュータの発達や計量経済学の発展によって、理論を実証的にテストすることが容易になり、理論に基づいた実証を行う新実証的産業組織論(NEIO)が誕生することになった。NIOとNEIOの発展によって、当時主流派であったシカゴ学派の主張を理論的・実証的に検証することが可能になり、シカゴ学派の主張が必ずしも全面的に正しくはないこと

が明らかになっていった。その結果、一九八〇年代後半になると産業組織論の主流は新産業組織論(NIO)となり、アメリカの競争政策はシカゴ学派のものから少しずつ変化していった。一九九〇年代になるとはやシカゴ学派の時代ではないという意味を込めて、ポスト・シカゴ学派の競争政策という言葉が広く用いられるようになった。すなわち、現在の産業組織論・競争政策の主流は新産業組織論とポスト・シカゴ学派だということになるし、現在はポスト・シカゴ学派時代だということができる。

私の産業組織論体験

私が産業組織論と出会ったのは慶應義塾大学経済学部の三年生だった一九八八年四月である。厚生経済学の川又邦夫教授のゼミに入ったところ、川又先生がいきなり「すごい本が出たんで

が、過去五〇年の間に急速に姿を変えた。アメリカにおける産業組織論の内容を概観すると以下のようなになる。

一九五〇年代から六〇年代にかけてはハーバード学派と呼ばれる、SCPパラダイムに基づいた実証分析を行う学派が主流であり、競争政策に対して強い影響力を発揮していた。しかし、一九六〇年代から七〇年代にかけて、一般均衡理論に基づいて市場メカニズムの動きを重視するシカゴ学派が、ハーバード学派の分析は「理論なき実証」であり、ハーバード学派の主張の多くは誤りであると主張してハーバー

すよ」といって、ゼミのテキストをその年の一月に発売されたばかりのティロール(Tirole)のThe Theory of Industrial Organization (MIT Press)に変えてしまったことによって、私はいきなり当時最先端の新産業組織論を原書で勉強することになった。今から考えてみると川又先生の選択はたいへん無謀なものであったといえるが、私はティロールの本に魅了されました。一年間本当に朝から晩までこの本を読みふけた。その結果、大学院に進学して産業組織論を研究しようと考えていたったわけだから、名著の影響力はまさに甚大である。

しかし私は、産業組織論という学問に対してその後十数年にわたって強い戸惑いを感じることになる。まず学部四年生の時に産業組織論の授業を履修したところ、授業内容はハーバード派の主張そのものであり、ハーバード

学派の立場からシカゴ学派の主張を批判する内容であった。一九九〇年に東大の大学院に進学しても、当時の産業組織論の担当教授はハーバード学派の先生とシカゴ学派の先生であり、それがハーバード学派の主張とシカゴ学派の主張を展開していた。テイローの本は、ミクロ経済学の授業で参考文献として挙げられていた。つまり、ひとつの大学の中でハーバード学派とシカゴ学派と新産業組織論が共存しているという奇妙な体験を私はすることになった。

一九九七年に東北大学経済学部で産業組織論担当教授として赴任し、産業組織論を教える側にまわったとき、初めにしなければならなかったことは、授業の教科書を選定することであった。そこで当時発売されていた産業組織論の教科書すべてに目を通してわかったことは、新産業組織論の立場で

書かれた日本語の教科書は一冊もないという事実であった。当時入手可能な産業組織論の教科書の大半は、ハーバード学派の立場で書かれていた。私はこの現実に少なからずショックを受けた。

日本語で書かれた新産業組織論の教科書は、二〇〇一年に小田切宏之先生の『新しい産業組織論…理論・実証・政策』が有斐閣から刊行されたことによつて誕生した。この本を手にしたとき、非常にほっとしたことを覚えている。さらにポスト・シカゴ学派の競争政策については、二〇〇六年に柳川隆・川渕昇編『競争の戦略と政策』が有斐閣から刊行されたことによつて学部学生が学習することが可能になった。

本書の特徴

有斐閣からアルマシリーズの一冊と

して産業組織論の教科書を執筆してほしいとの依頼を受けた時に、私は前掲の小田切宏之の『新しい産業組織論…理論・実証・政策』（有斐閣）、柳川隆・川渕昇編『競争の戦略と政策』（有斐閣）という二冊のすぐれた教科書が存在する状況で、同じ出版社で教科書を書くことに多少のためらいを感じた。

しかし有斐閣編集部の希望は、これら二冊の教科書よりもっと簡単な内容で、本当に初めて産業組織論を勉強する学部一〜三年生向きに、現実の事例をたくさん盛り込んだ教科書を書いてほしいというものだったので、それなら書けるかもしれないと思い直して引き受けることにした。初学者用の入門書レベルでは、新産業組織論やポスト・シカゴ学派の競争政策を紹介した産業組織論の教科書はまだ一冊も刊行されていない。一冊も刊行されていない以上、それを執筆することに一定の

意義があるだろうし、何よりも私ができるような本を必要としている。何よりもまず自分が必要としている本を写しと考えて、共同執筆者に『競争の戦略と政策』の柳川隆先生をお願いして『プラクティカル産業組織論』の企画がスタートすることになった。

すでに述べたように、『プラクティカル産業組織論』は初学者向けの産業組織論の入門書として企画された。目標は、現在発売されている産業組織論の教科書の中で、最も初心者向きの、最も簡単な教科書となることである。

その目標は、おおむね達成できたのではないかと思う。ミクロ経済学の知識は前提とされていないし、数式の使用は必要最低限にとどめて、できるかぎり数値例やグラフを使って解説するように心がけている。また、難しいという印象を持たれがちな産業組織論を、初学者にも楽しんで勉強してもらえようように説明をできる限り平易なものにした。

それと同時に、読者に理論と現実・政策の関係を理解してもらうために、現実の事例をできる限り多く紹介する

とともに、理論が政策にどのように反映されたのかを丁寧に解説するように心がけた。これらの試みを通じて、経済学部の学生ばかりでなく、企業行動についての理論的基礎に興味のある経営学部・商学部の学生や、政府の規制や競争政策に興味のある法学部の学生にとっても本書は最適な入門書になったのではないかと思う。

初学者向けの入門書といっても、内容は産業組織論の最新の動向をできるだけ反映させたものになっている。それと同時に、類書とは異なった試みを

いくつか行っている。

まず、第1章に「産業組織論の課題と歴史」という章を設け、産業組織論がどのような歴史的事情から生まれたのか、それが時代の変化とともにどのように変容していったのかを解説している。産業組織論はさまざまな学派が存在して激しい論争を行い、何が正しく何が間違っているのかを検証しながら発展してきた歴史を持っている。そうした歴史を振り返ることによって産業組織論のエキサイティングな魅力を読者に伝えたいと考えたからだ。

また、特定の学派の立場に立つことなく、あくまで「現在の」産業組織論の視点でこの本は書かれている。現在の視点に立つことによって、結果的に新産業組織論やポスト・シカゴ学派の競争政策に多くの紙面が割かれることになったが、ハーバード学派の主張やシカゴ学派の主張であっても、現在の

視点で有効だと考えられるものは積極的に取り入れることにした。その結果、偏りなく全体を見渡せる入門書になったと私は考えている。私の経験からいっても初学者はあまり特定の流派に偏った学習をするべきではないと考えたからだ。

さらに、多くの産業組織論の教科書では構成の最後に政府の規制や競争政策に関する章が設けられているが、本書ではそのような章立ては採用せず、近年の競争政策の動向を踏まえて、第3章から第12章までの各論の中で必要に応じて政府の規制や競争政策について触れることにした。こうすることによって、理論と政策の関係がよりストレートに読者に伝わるのではないかと思う。

すでに述べているように、現在はポスト・シカゴ学派時代である。そして、ポスト・シカゴ学派時代にふさわ

しい産業組織論の入門教科書を提供することが私のささやかな願いである。

『プラクティカル産業組織論』が私のその願いにふさわしい本であるかどうかの判断は、読者諸兄にゆだねることにしたい。

(いずみだ・しげみ)

|| 東北大学大学院経済学研究科教授

泉田成美・柳川 隆「著」

『プラクティカル産業組織論』有斐閣アルマ
四六判、二七六頁、定価一九九五円(税込)

● 好評発売中